
人文会 ニュース

業務用

本屋さんには

とても親しい場所だった、……………詩人 長田 弘 1
しかし……(一)

'84.10 41

御茶の水書房

水と人の環境史

2400円

鳥越皓之・嘉田由紀子編

〔琵琶湖報告書〕世界湖沼会議で今注目の水・環境問題を、水と人の織りなす生活の歴史から描く

自己とは何か。名の純粹さのきわみの死の復刊。
著 田辺 保者 1800円

東京・九段北1-8-2/03(265)5746

滝村隆一 700円 千250
ラスウエルと丸山政治学
理論的な背景を突き崩すへ丸山政治学の解体 第一弾。
伊藤章治 2200円 千250
現地 Тай最底辺 ほんの昨日
報告 少女の身売りや飢餓、タイの貧困地帯を行く熱いルポ。
加藤惟孝著／阪谷芳直編 2100円 千250
北京の中江丑吉 ある個性の記録
日本近代の生んだ珠玉——中江丑吉——その哲学を語る。

東京・文京 後楽 2-23 勁草書房 振替・東京 5-175253

哲学の三つの伝統

野田又夫 哲学の三つの源泉であるギリシャ、中国、インドについての論考と、日本の代表的哲学者についての論考を集成したもの ■二五〇〇円

道徳哲学

D・ラファエル／野田、伊藤訳 道徳哲学に関するさまざまな問題を包括的かつ理論的に論じている本書は、この分野への恰好の入門書 ■二五〇〇円

笑いと泣きの人間学

H・ブレスナー／滝浦静雄、他訳 人はなぜ笑ったり泣いたりするのか、本書は笑いと泣きに秘められた人間存在の本質を鋭く分析する ■二八〇〇円

紀伊國屋書店

本店：東京都新宿区新宿3-17-7
出版部：東京都千代田区五番地12

混迷の現代に光彩を放って、いま甦える——

評傳 宮武外骨 全1冊

内容案内

木本 至著 痛烈な諷刺諧謔家、卓越した雑誌編纂者、開ラジャーナリスト、内務省を震撼させた過激行動家、天下唯一の猥褻研究学者、浮世絵文化・川柳・明治文化、新聞雑誌など諸領域研究の偉大な開拓者の八十八年に及ぶ活動を細大洩らさず網羅した稀有の伝記研究書。
●10月末刊 A5判上製函入・予価二〇〇〇〇円

思想社 東京都文京区本郷1-25-21

ヒトラー政権下の日常生活
H・フォッケほか／山本尤ほか訳 定価二〇〇〇円

本屋さんはとても親しい場所だった、しかし…… (一)

詩人 長田 弘

街へゆくと、たいてい本屋さんに寄ります。書店というより、本屋さんといいたいんですが、本屋さんといえるような、そんな親しみのある雰囲気をもった街の店です。——と、そういつてみて、たったこれだけの言葉のうち、すでに、本屋さんの今日のありようをめぐって気になることのあらかたは、ほぼでそろつてゐるなあということに、気づきます。

それはどういふことかというところ、「本屋さんへゆく」というのは、いったいどんなたのしみなんだろうかという事です。本屋さんへゆくというのは、まあ、本を買いに行くためにゆくんだといつていいんだけど、ほんとうにそれだけだろうかとおもうんです。じつをいうと、本屋さんへいつてかならずしも本を買ふときまつたものでもないんです。欲しい本があつたら買ふだろうし、おもしろい本をみつめて手に入れたいとおもう

こともあるだろうけれども、また、どうも読みたいような本がないなあというかんじで、そのままできてしまうということもある。本屋さんへ十どいつて、十どいつてもかならず本を買ひもとめてくるということには、まず誰にもないんじゃないでしょうか。

たとえ、街へいつて、レストランへゆくとすれば、レストランには食事をしに行く。映画館へゆくとすれば、それは映画をみに行くんですね。劇場へゆくとすれば、芝居をみに行く。飲み屋にゆけば、酒を飲む。コーヒー屋ならば、コーヒーを飲む。話をする。そういう目的をもつていつてそうした目的をはたしてゐるところというのと、本屋さんというのとはちがうんですね。この本を買ひたいから本屋さんへゆくんだといふことももちろんあるんだけど、だからといつて、はつきりとそうした目的をもつて本屋さんへゆかなければならないとい

うことももちろんない。じゃあ、本屋さんへは、何をたのしみにそこへ足をむけるのかということですね。

しばらくまえに「パブリッシング・ブ・ウィークリー」という雑誌で読んでおもしろかったんですが、北アメリカの本屋さんにおける調査があつて、本屋さんへやってきた人に、どういう目的をもつていまあなたは本屋さんへやってきたかを訊ねて、そのこたえを集計した。そのこたえというのが、とても印象的でした。この著者のこの本が欲しい、この出版社のこの本が欲しい、あるいは書評や紹介でみたこの本を読みたい、ベストセラーであるこの本を読みたいといった、そうしたはつきりと特定された目的をもつて本屋さんへやってきた人というのは、むしろずっとすくないんです。もつともおおくをしまめたこたえというのは、「なんとなく」ということでした。なんとなくというのは、特定された目的をとくにもたずにといいことですね。それとおおかつたのは、買物のついでに寄つた、用事のあとでのぞいてみた、といったようなこたえですね。

それだけじゃなくて、はつきりとこの本が欲しいとして本屋さんへきた人も、その本があるかどうかだけみて

かえるんじゃないくて、かならずといていいほど、ふらりとべつの本をみてゆく。店で何冊ぐらい手にとつてみるかという問いには、一冊だけというこたえはすくなく、複数の本を手にするというこたえが圧倒的でした。

日本の本屋さんにおけるそうした調査の例は知らないのですが、おなじように訊ねてこたえを集計したならば、おそらくおなじような変わらない結果がでるんじゃないかとおもいます。なんとなく本屋さんへ寄つて、そして複数の本をふと手にしてパラパラみて、というふうなこたえが、やはりもつともおおくをしめるだろうとおもいます。

では、本屋さんというのは、なんとなくゆくところである。そうだとすれば、わたしたちにとって本屋さんというものは、いったいどんな場所なんだろうか、ということですね。本屋さんというのは、だいたい街にありまです。街の店なんです。ですから、わたしたちは街へいって、本屋さんへゆく。この本を買うぞ、だから本屋さんへゆくというんじゃないくて、(そういう場合だつてないとはいえないし、試験や宿題やレポートのためにドロナワとばかりに参考書をもとめに本屋さんへ走つたという

ことは誰にだってあるかもしれないけれども、街へゆく、そして本屋さんへ寄るといのが、本屋さんへゆく本来のゆきかたなんじゃないかとおもうんですね。

寄る。なんとなく本屋さんへゆくというのは、街へ行って、本屋さんへ寄るといことなんだ。「寄り道としての本屋さん」というのが、もともと街の店としての本屋さんわがわしたちのあいだにたもってきた開かれた性格だろうとおもうのです。けれども、どうかなあ。街にあって、本屋さんはそのような開かれた性格を、いまま生き生きとたもっているだろうかとおもうんです。だんだんそうじゃなくなってきた、寄り道をさそう魅力、開かれた場所としての魅力を、いまはむしろおぼえにくくなっているといことではないか、どうか。確かにそこへゆけば本がある。本がずらりとたくさんならんでいる。けれども、その本屋さんがその街のそこにあるといこととその街の魅力であるといふうには、本屋さんがかんじられないようになってきているといことではないか、どうなのか。

本屋さんが街にあって、いったいどういうような場所であるのかということが、いまはどうもはっきりとかん

じられなくなってきたようにみえます。なんとなく寄り道するといのは、そこがなんとなく気にかかるところだから寄り道するんです。本屋さんがそんなふうな街にあって気になる場所になつてようじゃないと、寄り道をさそわれる魅力はない。そうかんがえるならば、本屋さんは、街にあってまずもって、気になるところ、気にかかる場所という開かれた性格を、やっぱりきちんともっていなければいけない。寄り道したくなるような誘惑を、ですから本屋さんがどんなふうな街につくりだせるか、あるいはつくりだせているだろうか、ということですね。

いまたとえば、東京新宿の紀伊国屋書店を例にかんがえると、紀伊国屋書店は新宿で、待ちあわせの場所としてずいぶんつかわれているといことがあります。紀伊国屋書店のところには、いつも人待ち顔の人がいて、夕暮れともなればたくさんの方が約束をもって佇んでいる。すこし早目にいってちょっと本をのぞいて時間を合わせるといことはするかもしれないけれども、待ちあわせる約束をした人は当然にも、まず待ちあわせの約束をしたから紀伊国屋書店へにかけてゆくので、本を手

するために紀伊国屋書店へまず足をこぶんじゃありませんね。本を売るのがわからみれば、待ちあわせはそのまま本の売り上げにはならないでしょう。だけれども、そんなふうに待ちあわせにもっともかなくなった場所でありつけてきたところに、紀伊国屋書店が新宿の街につくってきた、街の顔としての魅力がある。

待ちあわせなんて、どこで待ちあわせたってかまわなはいはずなんです。しかし、そうじゃないんですね。どうでもいいんじゃないくて、そこ、というところがやはりあって、本屋さんというのはいしばしば街においてそうした役割をになってきた。そうだといいのも、それは、やはり本屋さんというのが街にあってなんとなく人の寄ってくる場所、気の留まる場所なんだということだろう。そうおもうのです。人と人がそこで落ちあう、あるいは落ちあえる場所としての本屋さん。そうした漠然としているようだけれども、確かなイメージというのを、本屋さんは街のなかにずっとたもってきたとおもう。そういうような場所として本屋さんが息づいているような街はたのしいけれども、そういうような場所としてすっかり街に根づいているようでない、おのずと足がむくような

寄り道の魅力が、本屋さんにそなわるようにはならない。実際、本屋さんに開かれた魅力のない街というのは、街として淋しいんです。

本屋さんへ寄るといえるのは、期待があって寄るんですね。はつきりこうとわかっていることを期待してじゃなく、何かおもしろい本があるかなあ、読みたくなる本があるかなあとか、そうそうあの本は評判だけどどんな本なのかとか、知らないだけでほんとうは読むべき本をみ定できないような「何か」を期待して、じぶんでもわかっているような何かがあるかもしれないという気もちをもって、本屋さんに寄る。そうじゃなしに、この本を是非でも欲しいときめてでかけるとすれば、その本がそのとき本屋さんにあればいいんだけど、さんざん探してもその本がみあたらなかったり、訊いてもわからないかかったり、あるいは注文しなければその場で手に入れないかかったりということもある。そして、それはけっこう愉快な気分じゃない。こんなにもたくさん本があつて、じぶんの欲しい本がそこになくというのは、身勝手と知ってて、やっぱりおもしろくないんです。

農民ユートピア国 旅行記

A・V・チャヤーノフ 和田
春樹他訳 ロシアの「1984
年」。60年間眠っていた驚く
べき未来小説が、いま甦る
く晶文社セレクション1200円

ニューメディア の逆説

粉川哲夫 ニューメディア
の出現によって、私たちの
生活はどう変るか？ 今日
の「電子情報社会」を生き
のびるための本。1300円

ヴィジュアル コミュニケーション の歴史

W・アイヴィンス 白石和
也訳 木版画から写真術ま
で——人間はいかにして複
製技術を獲得したか。複製
図版の歴史を分析。2500円

ドナルド・ダック を読む

ドルフマン&マトゥラー
山崎カヲル訳 デイズニー
漫画を徹底的に分析、その
文化侵略の構造を暴く。チ
リの話題の書。1600円

晶文社



東京都千代田区外神田2-1-12
電話255-4501

けれども、べつに目算なしに、なんとなく足がむいて、本屋さんに寄って、のぞいているうちに、じぶんでも予期していなかったこの本といえるような本を、ふっとみつける。そんなふうにして本を手にしたときってのは、ふっところが明るくなる。たのしいんですね。本屋さんにはいつてゆくときには、手に何もなかった。でも、でてくるときは、読みたい本を手にてでてる。そういうときっていうのは、とくに何ということもないんだけれど、愉快だということがある。そういう経験は、きっと誰にもおほえがあるんじゃないかなとおもいます。そんなふうに出会った本というのは、ふしぎにもその本を手に入れた本屋さんも一緒におほえていて、こんどもまたその本屋さんにゆけば、また何かおもしろそうなお本を

手にできるんじゃないかという期待がのこるんですね。本屋さんでは本を売ってる。でも、そこで本を買うということは、本を買うことによって期待を手に入れることだ。本というのは、とてもおもしろいもので、いつてみれば不見転で買うものなんです。何か特別の理由でもなければ、読んだ本を買うということは、まずないんです。読んでいない本を買うのであって、読んでみるまでその本については、たとえ評判や宣伝や知識をいくら詰めこんでたとしても、実際にじぶんで読んでみるまでは、何も知らない。読んではじめてびっくりするような本もあるけれども、読んでみたら投げだしたくなるような本だって、けっしてないわけじゃないんです。服とか靴を買うように、じぶんに似あう似あわないを確かめてから

買うということはないし、家具やオーディオ装置を買うように、こころづもりにみあうかどうかで買いかとめるということもとくにないうえに、厄介なことには、たいていは値の張るものがよいものというふうだけれども、本はそういえない。新しい古いということも、べつに決め手じゃない。

これだけは読まなくちゃいけないというような物言いには事欠かないけれども、本というのは、つまるところ何を讀んだってかまわないんですね。何をどう読むか、それは一人ひとりの自由であって、しかも何をどう読むにしろ、読んでみるまではわからないから、本を買いもとめるといったって、知らないものを買うしかできないのが本なので、ですから、本屋さんに寄ってそこで手に入られるものは何かといえ、じつは期待だけなんです。それだけに、そこに「何か」がある、すくなくともそこに「何か」があるかもしれないと、そうおもわせてくれるような本屋さんじゃないと、本屋さんというのは街で親しい場所にならない。寄り道してゆこうとふっと期待をさそうような何かを欠いている本屋さんは、本屋さんとしての魅力のみずから欠いてしまおうでしょう。

本がたくさんある。そこへゆけば本が手に入れられる。本屋さんというのは、それだけじゃないんだということなんです。本があつて、そこに「何か」がある。サムシングがある。それぞれの本屋さんの個性というか、魅力というか、それはそうした何かを、サムシングをどれだけ、どんなふうにもっているかということであつて、それがその本屋さんがその街にもつ雰囲気をつくる。街へいって本屋さんへ足がむくのは、そうした本屋さんのもつ雰囲気になんとなく引きよせられるからであつて、本を買わなくちゃいけない場所へ本を買わなくちゃいけないということで、足をむけるんじゃない。本屋さんへはいつてゆくまでもつ気もちというのは、本を買うんだというような明確なはつきりした気もちじゃない。本を買いたくなるかもしれない、読みたくなる本に出会うかもしれない、欲しくなるかもしれないといったような漠然としたはつきりしない気もちで、たいていは本屋さんへ足がむくんですね。

はじめに本があるのではない。はじめに本屋さんがあるということなんです。ほんとうに本の好きな人というのは、まずまちがいなく好きな本屋さんというのが決ま

っていて、その本をその本屋さんで手に入れるでしょう。本はどこで買ったっておなじ本なんです。その本をどこで買ったって、すこしもかまわないのです。けれども、やはりそうじゃないんですね。道筋だからとか、近くだからということもそれぞれに左右するだらうけれども、それでもやはりこの本屋さんに寄って、この本屋さんをのぞいてという気もちが、どこかにはたらいて、なんとなくじぶんの本屋さんというのができてくる。べつに顔見知りということがなくても、本さんの人と話を交わすということもとくになくても、どこの本屋さんでもいいというんじゃないで、しかもはつきりとそう決めていてそうだというのではないんだけれども、やはり「じぶんの本屋さん」というような本屋さんというのがこころにあって、ふと足がむく。

本屋さんへゆく人にとっては、本屋さんというのはそういうものだろうとおもうんですね。いってみれば、片おもいみたいな感情ですね。本さんにたいして、本屋さんへゆく人はどこかしらでそんな片おもいのような気もちをもっている。ですから、じぶんの本さんのようにおもえて足のむく本屋さんというのは、どの街のどの

本屋とも変わらない本屋さんというんじゃない。「その本屋さん」という感情がこころのどこかにあって、自然にじぶんの本屋さんといえる本さんができてくるんだけれども、そうした本屋さんへ寄る人のもつ片おもいのような親しい感情というのに、いま本さんのがわはよくこたええてるだらうかっておもうんですね。

いまは本屋さんというのは、街のなかにあるありようを重んじているというより、もっと社会のなかにあるありようを体しているというふうですね。本の動きに、社会の動態のいわば指数をみるというようなしかたで、本をいってみれば基数として、社会の現象を測る場所、というか。ともあれ、おおきな街のおおきな本屋さんであればあるほど、そんなふうに社会の動態というか、動向をうつしだす鏡のような役割を、いっそもとめられてるといっていいかもしれない。ベストセラーなんかでも、北アメリカの場合だと、「ニューヨーク・タイムズ」のベストセラー・リストとか「タイム」のベストセラー・リストとか、それぞれのメディアによるベストセラー・リストが目安になるけれども、日本の場合は、まずおおきな街のおおきな本さんででる数字が、そのまま目安に

なる。大阪梅田紀伊国屋書店調べとか、東京銀座旭屋書店調べとか。

一つの街の一つの本屋さんで数字のなかに、いわば社会の全体の趨勢がそのままでてくるとかんがえられている。そうであるところにすでに、本屋さんのいまのありようというのがよくわかれる。それだけに、どの街のどの本屋さんへいっても、たとえば土地柄にそれぞれ影響されるといことはあっても、全体的にはこの本屋さんだろうと、あの本屋さんだろうと、みた目にはほとんど変わらないんですね。そうじゃなくたって、本というのは、この本屋さんで手に入れられる本であれば、あの本屋さんでもおなじ本を手に入れられるというのが、もともとの原則で、たまたまその場得手に入れられないということはあっても、注文であれば、この本屋さんでもあの本屋さんでもいいんです。そういうことでは、どの街のどの本屋さんも、まったくおなじような表情をしていて当然かもしれない。ある街におきかな本屋さんが二つあるとして、その二つの本屋さんが全部の本をそっくりいれかえたとしても、たぶん不都合ないんじゃないだろうかとおもえるほど、どの本屋さんもお

なじょうなんです。

けれども、どれほどどの本屋さんもおなじょうであったとしても、おなじであるのは、ほんとうは本屋さんにある本だけなんです。社会のなかにあるのは、本屋さんにある本なのであって、本屋さんそのものというものは、やはり街のなかであって、その街に親しく属している。にもかかわらず、どの街のどの本屋さんも似たようなおなじょうな表情しかもっていないというのは、本屋さんがただに社会のなかにある本のかい容れものにならずにぎなくなってきたんじゃないか、ということですね。本屋さんというのは、けっして本がそこにあるという容れものだけの場所じゃないんだけれども、そういうふうになつてきて、それだけ寄り道としての魅力とか、道草の時間をたっぷり容れられるような場所であることが、ずいぶんとむずかしくなってきた。そのようにおもえるのです。

何にもまして話題が先立つという具合に、社会の様子になつてきていて、そうした事情は、本の世界においてもまた同様になつてきているし、こういう本がある、この本をみてみよう、そのために本屋さんがあるんだという

りにとっては、そういったとっても個人的な場所だろうとおもうんです。本屋さんへなんとなく足がむくとき、本屋さんへくる人は、たとえすこしもそうと意識してなくっても、胸のうちにじぶんのひつようをおさめて、本屋さんへくる。一人ひとりにとっての本屋さんというのは、本をまえにして、あくまでじぶんのひつようが先立つ場所なんだということですね。足がむく本屋さん、じぶんの本屋さんといえるような本屋さんというのは、そういう一人ひとりがじぶんのひつようをみつつけられるような親しい場所なのであって、本屋さんというのとは、もと一人でゆっくりとゆく場所なんです。仲間や友人といっても、一緒にじゃ落着かなくて、たいてい本屋さんにいるあいだはべつべつになる。本屋さんというところは、どうしたって一人のじぶんが本とサシでむかいあうところなんです。

そういうふうに、本屋さんという場所は、もともと一人ひとりのいる場所なんだということですね。そうしたとしても個人的な場所として、街のなかに開かれた場所としてある本屋さんのありようというのがいまもおもんじられているだろうかという、本屋さんからそうした

親しみをもった雰囲気は、いつからかうすらいできてますね。しかし、一人ひとりのひつようへよりも社会の趨勢のほうへ顔をむけることで、どの街のどの本屋さんもほぼおなじようになってきてるようにみえるのは、時流にかなってようできて、じつはちがうだろうとおもいます。本屋さんにおいてその仕事のおおくをしめるのは、かならずしも社会的に騒がれるような本本なのではない。そうした本が一日にはじきだすまとまった数よりは、目立たないけれどとんでんばらばらに一日に一冊あるいはせいぜい数冊でるような本をぜんぶ足した数のほうが、当然ながらいつでもずつとおおいのであって、そうした一人ひとりのひつようをどれだけ引っぱりだし、どう受けとめられるかということが、本屋さんにとってはあくまで肝心なんです。

魅力的な本屋さんとはどういう本屋さんかをかんがえるとき、おおきな本屋さんといさな本屋さんとはそなえる魅力はおのずとちがってきて、ちいさな本屋さんの魅力というのは、やはりその本屋さんがどれほど個性であるかということですね。古本屋さんの場合だったら、まあだいたいあつかう本がさだまってる。どんな分

野、何の領域を専門とするかが、すなわち店の看板になる。新刊書であっても、子どもの本のような場合は、専門店としての子どもの本の本屋さんがすでにできてきますね。そういうふうに専門の看板をかかげなくとも、ミステリにかけてはあの本屋さん、料理の本ならこの本屋さんといえるような街の本屋さんもあるし、エコロジールにかかわる本ならば、あるいはアジアをめぐる本ならば、といわれるようなちいさな本屋さんもある。

そういう本屋さんというのは、目的をもった本屋さんです。目的をもって、間口をむしろせまくして、独自のネットワーキングをもつ。それだけに特色をはっきりともちやすいけれども、またそれだけにやはりどうしても敷居が高くなるということがあります。目的をもった本屋さんをささえるのは、あくまで目的をもってその本屋さんへゆく人で、そこへゆくことは、地域にとらわれないしかたで、共通の関心のおかれてあるところへゆくということですから、そうじゃなくて、そんなふうにとくにどの分野、どの領域ということはないが、おかれてる本に、なんとなく、本をよく知ってるなあとおもわされるような街のちいさな本屋さんがある。「本屋

のおやじさん」がいる本屋さん。そういった本屋さんというのは、目的をもった本屋さんとはちがって、界限の日に根を下ろして長いつきあいというかたちで、いわば顔なじみというようなかかわりかたによってささえられるので、それだけに時間の元手がいる。

それぞれの街のちいさな本さんの、そうした個性というか、一くせも二くせもある魅力をつくってきたものは何かといえは、それはフェイス・トゥ・フェイスといえるようなところやすさだったろうとおもうんですが、いまは、日常の仕様にまでおよぶ都市化がどんどんすすんできて、一人ひとりの日々のありようというのがどんどんと変わってきた。そして、一人ひとりにあつての日々の時間のつかいかたが、まったくいいほどちがってきた。そうした一人ひとりの生活の時間の変わりようのなかで、一人ひとりの本屋さんへのかかわりようというのもまた、どんどんと変わってきた。

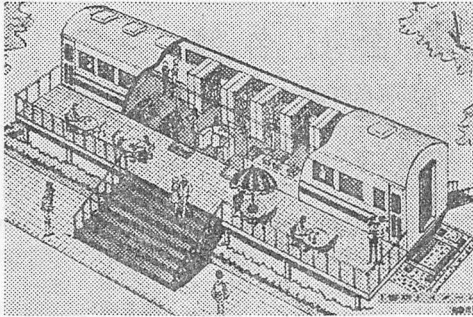
暮らしの土台が引越し社会になって、そのうえ働く場所と住まう場所というのがはっきりと離れてしまふというのあたりまえになって、それぞれの日常のなかに「ちかくの本屋さん」というふうな長い時間を元手とす

る親しいかわりようというのはそだちにくくなってきたるようにおもえる。めいめいの地域にあって、むしろ本の世界とのつきあいのおおきは、ますます地域の図書館が果たすというふうになってきていることもある。そういうなかで、街のちいさな本屋さんというのは、ほとんど雑誌と、それにペーパーバックに話題の本をくわえておくというしかたしかとれなくなってきたようにみえるんだけれども、ほんとうにそうだろうか、そうじゃないんじゃないか、とおもうんですね。街のちいさな本屋さんというのは、むしろこれまでとはちがったしかたで、もつとずつと個性的であるようなありかたがのぞまれるんじゃないでしょうか。

それというのも、どんなふうに暮らしぶりが変わったにせよ、一人ひとりのがわからいえば、本屋さんへゆくゆきかたというのは、あくまでなんとなく気になって、なんとなく寄る、寄り道する。そればかりはどうにも変えようがないんですね。なぜなら、本というのは、どうかんがえようと、つまるところ「無用の用」しかないものだからで、それがなくていいかひつようかは、あくまで一人ひとりの気もちなんですね。そうした

一人ひとりの気もちを引きたてるといふか、引きつけるような気がかりな場所でありうるありかたが、一人ひとりの日々のありようが日常の仕様にまでおよぶ都市化のなかで変わってきたなかで、街のちいさな本屋さんにいまじゅうぶんに活かされているだろうかといふと、むしろかしくなってるなあとおもうんですね。

新聞でこんな記事を読みました。国鉄が不用になった客車と緩急車を売りに出す、という記事です。緩急車というのは、車掌室のついた貨車。客車のほうは車輪つきで塗装しなおして三百万円前後、緩急車のほうは車輪を外して未塗装で二十八万円からというのですが、そうしたものをどうしようというのかといふと、こんなふうにつかってくださいと提案してる。客車はレストランやパブにどうか、と。それで、緩急車のほうはというと、おもしろいことに、たとえば街のちいさな本屋さんにはどうだろうかとして、その試案が図示されてるんですね。たまたま国鉄が不用になった車輛を売りに出すためにかんがえた案にはちがいないけれども、それでもこの絵には、街のちいさな本屋さんがこんなふうであったならどうだろうかとおもわせるところがある。つまり、本屋さ



(毎日新聞1984年7月31日号)

んのがわからでなく、本屋さんへゆくほうのがわからかんがえられた街のちいさな本屋さんのイメージが、実際に可能かどうかはべつとして、この絵にはあるでしょう。そこへゆくこと、そこへ足をむけることがたのしい場所であるようなところとして、街の本屋さんというのがイメージされてる。そういう本屋さんへ足をむける一人ひとりのがわからの期待というのをどう活かすかという

ところから、本屋さんのありようは問われなくちゃいけないんだとおもうのです。本さんが、そこへゆくこと、そこへ足をむけること、のたのしい場所として、いま日々親しく感じられているだろうかという、けっしてそうはいえないようにみえるとす

れば、それはなにも視聴覚の時代の活字離れなんだからしようがないというようなことじゃない。本さんのありようそのものが、日常のありようのなかでいま親しいありよう、親しい提案をみずからもつていないように、あるいはとてももちにくくなっているようにみえるということのためじゃないでしょうか。

そうであるからこそ、人びとのもつライフスタイルのなかで、本屋さんの親しいありようというのが、もっとなんと大胆にかんがえられていいし、かんがえられないといけないのではないか。街のちいさな本屋さんについてかんがえてそうおもうのですが、そのことはいま、ちいさな本屋さんにおいてというより、いわゆる大型書店とよばれるような街のおおきな本屋さんにおいて、なにより根本のこととしてのぞまれている。そうおもうのです。

(つづく)

これは本年五月十二日静岡岡伊東市で行われた人文会と紀伊国屋書店の合同研修会において話したことをもとに、その後の資料をくわえ、稿を起したものです。

人文会会員名簿

(113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)

59.10.1現在

	社名	担当者	〒番号	所在地	電話
幹事	青木書店	山根 襄	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481
幹事	大月書店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651
	御茶の水書房	和田 充博	102	千代田区九段北1-8-2	230-2510
	紀伊國屋書店	佐久間健雄	102	千代田区五番町12 ドミール五番町	263-9006
幹事	勁草書房	氏家 富男	112	文京区後楽2-23-15	814-6861
幹事	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷2-25-4	813-8105
	春秋社	神田 治	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611
	晶文社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4501
	誠信書房	濱地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666
	創元社	可児 輝夫	162	新宿区山吹町77	269-1051
	筑摩書房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4 東海ビル	356-1541
幹事	東京創元社	長谷川 裕	162	新宿区新小川町1-5	268-8231
会長	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	812-2111 内7955
	〃	竹内 康一	〃	〃	811-8814
幹事	日本評論社	後藤 光行	160	新宿区須賀町14	341-6161
休会中	福村出版		112	文京区小石川1-3-17	813-3981
	平凡社	伊藤 隆	102	千代田区三番町5 Kビル	265-0455
	法政大学出版局	阿部 好文	102	千代田区富士見2-17-1 法政大学構内	237-1731
代表幹事	みすず書房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131
	未来社	藤森 建二	112	文京区小石川3-7-2	814-5521
	雄山閣出版	武 一雄	102	千代田区富士見2-6-9	262-3231
	有斐閣	佐藤 進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811
	吉川弘文館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151

販売委員会 ◎氏家 佐久間 伊藤 岡田 佐藤 川越

弘報委員会 ◎原田 和田 萬洲 可児 藤森 武

調査・企画委員会 ◎渡辺 竹内 神田 濱地 菊池 阿部

◎印は委員長

生と覚醒のコメントリ

クリシユナムルテイの手帖より

全4巻

クリシユナムルテイ著 / 大野純一訳 ①2巻各二四〇〇円

伝統的通念を透明な否定の炎で焼きほろぼし、全世界のあらゆる分野の人々に深い影響を与え、続けてやまない孤高の天才宗教家の主要作!

こころの本 第一期・全6巻

紀野一義編 柳宗悦 亀井勝一郎 (近刊)

春秋社 東京都千代田区外神田
2-18-6 ☎(03)255-9611

江戸人の昼と夜

野口武彦

閉塞状況に喘ぐ有名無名の武士知識人の様々な生のかたちに透徹した眼を据え、その志の行方に、もう一つの現代といふべき江戸を読みとる力作。 1800円

私のシベリヤ

香月泰男

飢餓と酷寒の抑留体験を沈鬱な色調に深め独特の画面構成をもつ名作「シベリヤ・シリーズ」で名高い画家の一卷文集。 筑摩叢書290 1400円

筑摩書房

101 東京神田

小川町2-8

日本人とアイデンティティ

河合隼雄著

四六判三五〇頁一三〇〇円

日本を代表するユング派精神分析家の最新エッセイ集。幅広いテーマを扱って深い洞察に富んだ魅力あふれる書。

人間回復の医学

池見箇次郎著
小B6判二八六頁七八〇円

セルフ・コントロール医学の展開

病める現代社会の中で人間回復の道を探る著者の至情にみちた書

◆セルフ・コントロール―交流分析の実際― 六八〇円

◆続セルフ・コントロール―交流分析の日本的展開― 六八〇円

創元社

06-363-2531
03-269-1051

大阪市北区西天満1-4-2
東京都新宿区山吹町77

神と日本人

日本宗教史探訪

1800円

村上重良著 斯界の第一人者がつづった、他に類をみないイメージ豊かな日本宗教史入門。

歴史を運んだ船

神話・伝説の実証

2500円

茂在寅男著 有斐閣 古代人は太平洋を横断していた。航海学・古代史・言語学を駆使して歴史を見る。

東海大学出版会

東京都新宿区新宿3-27-4 東海ビル 電(03)356-1541

アメリカ 知的冒険旅行

長尾龍一著

1200円

敏腕の女性記者を相手に裁判を起こすなど、初めての外国生活を体験した気鋭の法学者のみたもう一つのアメリカ。

検証免田事件

熊本日日新聞社編

1400円

免田事件の34年は、わが国の捜査・司法が抱える問題を鋭く指摘している。

自白崩壊

狭山裁判20年

狭山事件再審弁護団編

1500円

アリバイ立証する小名木証言が提出された狭山再審は大詰めを迎えている。



日本評論社

〒160 東京都新宿区須賀町14

東京創元社

K・S・シタラム著

〈現代社会科学叢書〉

11月刊

異文化間コミュニケーション

欧米中心主義からの脱却

御堂岡 潔訳

四六判 三三〇頁
予価一、七〇〇円

異文化間コミュニケーションにおける基本的な問題点、およびそれを円滑に行うための具体的な方途を、インドに生れ、アメリカで教壇に立つ社会学者が平易に説く。

東京新宿新小川町
03-268-8231

東京大学出版会

待望の新講座十月刊行開始! ●全13巻

講座 日本歴史

歴史学研究会/日本史研究会編集 中学・高校の社会科(歴史)担当の先生方に、歴史に関心をもちつる学生・社会人のみなさんに、日本史の主要論点を、わかりやすくとき明したハンデイな講座として、おすすめします。

- 十月から毎月一冊、巻順 ①原始・古代1 ②古代2 ③中世1 ④中世2 ⑤近世1 ⑥近世2 ⑦近世3 ⑧近代1 ⑨近代2 ⑩近代3 ⑪近代4 ⑫現代1 ⑬歴史における現在
- 四六判 平均三三〇頁 各巻一五〇〇円
- 内容見本屋

「新版」絵巻物による

日本常民生活絵引

全5巻へ付・総索引1巻

滋澤敬三/神奈川大学日本常民文化研究所編
料理の仕方、いろいろな座り方、子どもの遊び……選びぬかれた822の「絵」から、中世日本人の「生活」を読み解く画期的試み。
体裁B5判・上製・カバー付き/各巻平均260ページ/図版各巻平均165点

全巻セット定価
24,000円
分売はいたしません

平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5

法政大学出版局

中川作一 四六判・定価二八〇〇円

目と絵の 社会心理学

ものの「見え方」が文化的・社会的環境によつて変化することを心理学実験を用いて証明。美術史と思想史・社会史の接点から、透視画法、浮世絵、フランス実証主義、印象派等を考察する

東京都千代田区富士見2-17/☎237-1731

一〇〇〇回上演記念出版

夕鶴の世界

作者木下順二による演出メモをはじめ、山本安英など歴代のスタッフ、キャストの聞き書き、劇評、評論などを満載し、併せて定本戯曲『夕鶴』を収録する第二次総合版。舞台写真30枚。呈内容見本A5判上製貼函入/口絵112頁・50数葉
総頁11約四八〇頁/定価11六八〇〇円

東京・文京 未来社 電話・代表
小石川3-7 (814) 5521

田村栄太郎・著作シリーズ

日本職人技術文化史^{上下}

古代からの日本の職人技術と、外来技術の日本化の中で育てられた封建社会における職人の一子相伝の技術、組織、作法、生活等、職人の世界を部門別に詳述。③3,800円 ④4,800円

人物・近世産業文化史

農民指導ほか各種産業の技術開発に貢献した先駆者の業績を掘り起こす。
3,800円

人物・近世洋学文化史

●11月5日刊行予定 3,800円

雄山閣

千代田区富士見2/振替東京3-1685

小学教師たちの有罪

回想・生活綴方事件
国分一太郎 生活綴方教育に情熱を燃やした東北の教師たちが、治安維持法違反に問われた事件の真相を語る。 3000円

エリノア・マルクス

ある社会主義者の悲劇
都築忠七 マルクスの未婚エリノアの人間の悲劇をえがき、初め英語で、つづいて欧州各国語に訳された名著。 3000円

山口茂吉

豊藤茂吉の周辺
加藤源子 「後生哀るべし」と大茂吉に云わしめた山口茂吉の生涯と作品を追憶・記録し、茂吉山脈を精細に解剖。 2800円

フォークナーの町にて

加島祥造 この大散文家のもつ詩人の魂、その喜劇的精神、笑いと微笑をたずねる旅。みごとに散文に結晶した一言0円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

ドイツミツクな新しい人間の境方を温める!!!

日本人の深層分析 全2巻

馬場謙一・福島章・小川捷之・山中康裕編集

- ①母親の深層(第①回記本)
 - ②父親の深層(第②回記本)
 - ③工口スの深層
 - ④攻撃性の深層
 - ⑤夢と象徴の深層(第①回記本)
 - ⑥創造性の深層(第④回記本)
 - ⑦病める心の深層
 - ⑧日本人の深層
 - ⑨子どもの深層(第⑤回記本)
 - ⑩青年期の深層
 - ⑪老いと死の深層
 - ⑫現代社会の深層
- 1,800円
◇四六脚上製平均③②②④頁



有斐閣

東京神田
神保町2

中国抗日戦争史 石島紀之著

10月刊
下旬刊

南京市文史資料研究会編 加々美/姫田 訳解説

証言 南京大虐殺

人間はかくも残酷になれるものか! 中国側が立証。犠牲者は40万人以上! 日本軍隊による南京大虐殺の実相が、中国側の資料と証言の初邦訳でいま、さらに明るみに。〈付〉南京大学歴史系編「南京では40万人のひとびとが虐殺された」

定価一五〇〇円

東京神田 **青木書店** 神保町1

豊かな伝統を持つ宗派の歴史を探る。基本的業績を集大成。

日本仏教 宗史論集

全10巻
10月より毎月一冊ずつ刊行
A5判・上製・平均四五〇頁
定価各五八〇円(分売自他)

- 全十巻の構成
 - ①聖徳太子と飛鳥仏教
 - ②南都六宗
 - ③伝教大師と天台宗
 - ④弘法大師と真言宗
 - ⑤法然上人と浄土宗
 - ⑥親鸞聖人と真宗
 - ⑦栄西禅師と臨済宗
 - ⑧道元禅師と曹洞宗
 - ⑨日蓮聖人と日蓮宗
 - ⑩一遍上人と時宗
- 詳しくは「内容見本」送呈

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2-8

子どもたちの昭和史

●全国から続々、熱い反響 A4判変型・2,500円

「写真集」

好評4刷
4万部突破

- ▼朝日Ⅱ戦争の悲惨さ、恐ろしさ、愚かさを伝える記録集
- ▼毎日Ⅱこの写真集を囲んで新しい親子の対話も可能
- ▼読売Ⅱ親が子に自分の子どもたちのころを伝える好資料
- ▼夕刊フジⅡ一枚の写真が百の言葉にまさる証言

東京文京本郷 **大月書店** 03-813-4651

非売品

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印